

旧約での説教の可能性

日本基督教団大曲教会牧師

飯田 敏勝

毎週説教の課題を担っている牧師にとって、どの聖書箇所にするかを定めるのに、主として二つの方法があろう。一つには聖書日課を用いることであり、また一つには、連続講解説教である。前者の場合、特定の書物に片寄ることがないよう、そしてまた、福音書や使徒書との関連が、既に配慮されている。後者の場合、特別な祝祭日や特定の主題説教がさしはさまれることはあるにしても、特定の書物を隈なく取り扱うのが常である。

そのとき、六十六巻を均等に扱うことは、難しい。

自らの十余年間の選択にしても、他の牧師たちの事例を聞いても、連続講解説教で旧約を扱うことは、新約に比べれば決して多くはないであろう。

個人的な体験談になるが、最初の赴任地においては「ヨハネの手紙一」の連続講解説教から始めた。教会学校で育ったため、暗唱聖句とされていた箇所が多く含まれ、自らの信仰の基となっている思いが強かったからである。この書の言葉なら、確信が伝えられると思えた。その後、キリスト教の中心となる主イエス・キリストの言動を直に伝えるということで「ルカによる福音書」と、それに続く「使徒言行録」。また、パウロの手紙を扱った。転任しても、福音書と書簡は扱うが、その間に旧約から「ヨナ書」と「ルツ記」を既に扱った。それらは小さな書物ゆえ、全体の構造が見えていたため、また、部分部分において新約との関係が予め見出せていたため、これに臨んだのである。

ただ、ここ数年は「出エジプト記」に挑戦している。長い書物であって先のような見通しは立っていなかったが、奴隷解放が基本罪の赦しと重なることと、その前後の生き方を語る書物であるという概観によって臨んでいる。

ただ、旧約中のどの書のどの箇所でも、無条件的に説教できるとは言い難い。少なくとも、連続講解の手段でいくならば、困難を覚える文書や箇所が、特に旧約中には

多くあると言えよう。

旧約の説教が難しい単純かつ最大の理由は、歴史証言としてはイエス・キリストを見出せない点にある。

しかしまた、ここに旧約聖書神学の特徴があろう。

新約聖書神学、また、組織神学、歴史神学も、啓示の源として主イエス・キリストを含みうる。単純に言えば、主イエスがこの世に来られた後から、これらの各分野が展開できる。だが、旧約聖書神学は明らかに違う。それ以前のこの世の時間が、対象となっている。

そして現代、一般的に文献に基づく研究で、古いものほど正しい、オリジナルこそ正しいという価値判断があろう。それを突き詰めることも、一つの学問的姿勢としては認める。が、少なくとも旧約を扱う際、単純にその姿勢では、「イエス」が出てこない。それでありながら、その「イエス」が「主」であり、「キリスト」であることを証言することは、いかにして可能なのか。

旧約と新約の関係として、預言と成就という言い方がよくなされる。だが、その考え方だけでは、対応しきれない部分もある。連続と断絶があったり、通時性でなく共時性を考えたり、多種多様な新約と旧約の関わり合いがある。説教においても、旧約と新約を対比させたり、発展していく要素を見出したり、類似性を語ったりという形で、この理解を実践にうつしていくのだ。

ただ、最も心すべきは、旧約がただ単に「古い」ものではなく「古い」ものである点だ。

新しい基準が生じたため、旧くなったのだ。ゆえに、新約なくして旧約はありえない。文献学的研究（また考古学的など周辺領域）においては旧約の対象範囲に「イエス」はないが、これを古いものとしている規準はまさにそれなのだ。

そして、説教の可能性もここに開けてくる。

教理的思弁や、歴史証言も基にするが、何よりも主イエスのルカ 4 章で切り拓かれた道に頼る。

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ 4 章 21 節）という主イエスの言葉を支点にして、「その口から出る恵み深い言葉」（同 22 節）をわたしたちの持ち場においても作用させる。

初代教会はわたしたちが旧約と称する諸文書を基に説教をしたのである。わたし自身が旧約で説教をする最大の動力源は、実のところ、異端になりたくないという思い

からだ。異端は単にまがまがしい教えではない。初代教会に反する教えだ。そして、下手すれば人知において踏まえられることが異端になりかねず、神秘——ひいては、その言葉を聴いて信じて命を得る道となる——を保つために、初代教会の姿勢を継承していくのだ。

そしてまた、他の神学諸分野においては下手すれば学問的研究がそのままキリスト教の教えにとって変えられてもおかしくないが、旧約聖書神学はそれ以上の見解、また、福音の力や教会の姿勢への信頼が必要とされる。

信仰告白でうたわれていることも、大きい。

規範する規範である聖書正典の議論は学者たちにある程度ゆだねるとしても、現場の牧師としては、規範される規範で明言されることに頼る面も大きい。また、この聖書という書物が何を語るのかも、日本基督教団信仰告白のように教会がそのように定められていることをわたしたちも踏まえる。旧約も含めて、イエス・キリストの救いを語るために、わたしたちの手にある。ウェストミンスター信仰告白において、原典が啓示と関わらせて語られていることも大いに励まされる。原典釈義はオリジナルだから真理が明らかになるのではなく、啓示のために仕える研究なのだ。

旧約を説くことで、思想に傾くのではなく、肉迫する言葉を語れる。以下それらを羅列するが、神と人間について語る書であるが、ユーモアすら交えつつ人の赤裸々な姿を描いている。

単純に意味が分からない箇所もあるが、立ちどまり、御心を求めるべき箇所とする。

歴史の流れを追う必要性があり、預言者をはじめとして、将来の希望に生きる姿勢。また、文学による現在を深めることにも役立つ。

そうしたことを踏まえつつ、なによりもチャレンジとして旧約の説教に臨もう。学んだからといって十分にできるものではないが、教会という守りの中で自分の力以上のものが発揮されることになる。